

## 自主シンポジウム 1

## “ふり”の発達

企画・司会；

話題提供者； (1)「初期のふり遊びを支えるものは何か」

(2)「乳児のふり遊びの発達 - 人形遊びの・・・」

(3)「身振りと言語の表出から捉えた“ふり”」

(4)「“ふり”における“心理状態”の変容」

指定討論者；

麻生 武 (奈良女子大学)

木下 孝司 (静岡大学)

小山 正 (愛知教育大学)

吉崎 敏江 (上智大学)

加用 文男 (京都教育大学)

無藤 隆 (お茶の水女子大学)

“ふり”とは何か？ 改めて考えるとなかなか難しい問題である。はたして“ふり”と呼ばれる単一の現象が存在するのか否か、といった基本的ことがらにも、まだ研究者間に意見の一致があるわけではない。例えば、麻生（印刷中 “ふり”の三つのタイプ 「人間と世界」仮題 永田文昌堂）は“ふり”の3つの異なるタイプを区別すべきではないかという提言を行っている。仮にこのような主張が正しいとしても、どのようにそれらの特徴づけるのかといったことは、まだまだ未解決の問題である。これ以外にも、数多くの重要な未解決問題が存在する（麻生 1994 “ふり”と象徴能力をめぐる諸問題 重点領域研究「認知・言語の成立」報告書 Pp.39-49.）。“ふり”の産出と理解とはどのように関連しているのだろうか、また“ふり”と象徴能力とは関係があるのだろうか、“ふり”とメタ表象能力とはどうか、“ふり”の能力といわゆる「心の理論」を持てることとの間にはつながりがあるのだろうか、などの興味深い難問が数多く、“ふり”の周囲には存在している。“ふり”というテーマは、今日の発達心理学研究の焦点の一つになっているといっても過言ではない。

今回のミニシンポでは、子どもの“ふり”について強い関心を抱き、それらについて日常生活場面で詳しく観察されてきた方々に発表していただくことにした。木下孝司、小山正の両氏は、これまで日心や教心や発心で、御自分の子どもの日誌的観察データをもとに、“ふり”についての発表を重ねてこられている。吉崎敏江氏は、身近な生活環境の中で参加観察することができた姉の子どもの縦断的観察データをもとに、“ふり”を含む子どもの精神発達について興味深い研究をされている。加用文男氏は、幼稚園児や保育所で、子どもの遊びに具体的に参加的にかかわりつつ、子どもの“ふり”意識・遊び意識について実にユニークな研究をされている。

4名の発表者の共通点は、自然な状況における具体的な子どもたちの観察データをもとに研究をされてい

る点にある。ここに今回のシンポの最大のメリットがあると考えている。コメンテーターは、「自己や他者の心の理解」の発達を解明しようと、目下、数十名の乳幼児を縦断的に追跡研究されつつある無藤隆氏である。このシンポで、互いの詳しいが個性的で偏りのある事例的観察のデータを重ね合わせることによって、「子どもの“ふり”の発達」の研究に、今までの研究では見えてこなかった新たな地平が開かれるようになればと願っている（麻生武）。

(1)「初期のふり遊びを支えるものは何か」（木下孝司） この間、ふり遊びを初期の「心の理論」の現れとしてとらえ、両者を橋渡しする認知論的モデルが注目されている。しかし、そこで扱われるふり遊びという現象の記述の内容とともに、モデルの前提となっている「ふり遊び」観そのものに気になる点がある。本報告では、そのような問題を整理して、他者との関係性が二重の意味でふり遊びの発生基盤になっているという問題提起を行い、そこから以下の点について報告したい。

①初期のふり遊びは、まず第一に固有の情動的・身体的シグナルを独自の存在様式としてもった「態度」を共有するものとして成立し、それには「からかい的行為」など他者の意図とのやりとりそのものを楽しむという関係性との連続性がある。そこに従来考えられたよりも早期からふり遊びの共有可能性があると同時に、「ゆらぎやすさ」がある。

②上記の段階から、ふり世界の自立化が進むのに伴い（2歳後半）、反省の意味レベルでの共有が可能になっていく。しかし、後者が前者の段階にとって代わるのではなく（つまり、つねにふり遊びにおける意味の二重化が対象化されるのではなく）、ふり遊びにおける意識性あるいはそのタイプには多重性が見られる。

そして、この多重性の内実を明らかにすることは、これまで概念レベルでの心の理解を主に問題にしてきた「心の理論」研究を、乳児期からの間主観的レベル

での心の理解の問題と統合させていく上で重要なものであることを最後に問題提起したい。

(2)「乳児のふり遊びの発達 - 人形遊びの発展過程にみられる他者への同一視を中心に-」(小山 正)

象徴遊びを問題にすると、子どもの遊びの中に表現される現実生活経験の内容が豊かであることが前提である。1、2歳児の子どものふり遊びでは、現実の生活経験が反映されながら発達し、特に日常生活における人形でのふり、ごっこ遊びをみると、これまで実験的に事物操作中心に論じられてきたように簡単に進んでいるとは思えない。そこには、加用(1992)が指摘する遊びの中での現実とごっこの混同という重要な問題も含まれる。

一方、発達遅滞児への前言語期における指導において象徴遊びの療育的意義について検討されているが、指導の場でみられる象徴遊びの進展が、彼らの日常生活における遊びに生かされて、外界認知の拡大や認識の発達につながっていることがまず大切で、発達遅滞児の象徴機能の発達とその援助、療育への象徴遊びの適用を考えるうえで、先述した現実生活経験とふり遊びの関連性についての基礎的研究が必要である(小山、1994)。

そのようなことから筆者は、子どもの現実生活における日常的経験とふり、ごっこ遊びとのつながりに視点をあて、一人の乳児(現実生活経験をできるだけ把握したいことから筆者の第一子を対象にした)を生後4か月から2歳まで縦断的に観察している。

ここではその観察資料から、特に人形での遊びの中でこの時期のふりの発達過程にみられる子どもの心理を探るうえで興味深い観察例を紹介しながら、主として、①日常生活における他者(大人)の行為の取り入れ、同一化とふり行為の精緻化、②人形を用いた遊びに代表される他者への同一化と事物のみたて能力との絡み、の2点について検討したい。

(3)「身振りと言語の表出から捉えた“ふり”」(吉崎 敏江) 新生児期から3歳過ぎにわたる参加観察の日誌記録に主として依拠しながら、“ふり”をめぐる試論について報告する。

乳児は、特に生後6か月ほどの間、対人場面において模倣とも呼べるし情動調律とも呼んでもいいような身振りを頻繁に見せてくれる。この身振りは、身体の全体的または一部の動作あるいは発声を含むが、相手に同調するかのごとき“身のふり”であるとみなすこ

とができる。

およそ7か月を過ぎた頃より、模倣的な相互作用から、自ら主体的な行為としての“ふり”を仕掛ける段階へと進むようになる。その“ふり”は、一種の知識表現であると言ってもいいかもしれない。観察対象児Y(女兒)においては、1歳前後から、食事の場面で人形への食べさせ行動が頻出する。人形を相手に、食事の“ふり”が繰り広げられていたことになる。

その後ことばを話し出すようになると、ことばを媒介にした“ふり”が展開される。日常性を残したごっこ遊びから始まり、象徴的なサインである言語による“ふり”は、子どもの好悪や関心を反映したファンタジーへと変貌していく。この時期の言語は、次第に自己のコントロールや制御に手を貸すようになるが、あたかもそのような目的にあわせたかのような“本当を装うふり”も出現する。その“ふり”は、子どもがそうと知った上で行為する一種の欺きである。特にYに関しては、排尿訓練にまつわる葛藤から、事実を偽る心的現実を表す“ふり”が言語で表出されたと捉えられた。

身体行動および言語行動による“ふり”から、精神発達レベルだけではなく、当時点における子どもの主要テーマや情緒的な状態も推測することが可能であると考えられる。

(4)「“ふり”における“心理状態”の変容」(加用文男) ごっこという遊びには、ある基本的な矛盾が含まれています。ビューラーが指摘しているように、人形ごっこをする子どもは、いくらその気になってはいても人形が本当の赤ちゃんであるとは思っているわけではない。意識としてのうそっこ性があるわけです。しかし、他方では、もしも子どもが「僕は本当は〇〇だけど今はうそっこで〇〇になっているんだ」という2重性の意識を持っていたとすると、ごっこ遊びは実に馬鹿げた遊びであり、なぜ面白いのか分からなくなります。

そこで、以前(1983)私は、ごっこにおいて子どもたちの心理状態が変容している(融合状態、対立させて意識する状態、現実志向状態)という仮説を提起しました。しかし、融合状態といっても3、4歳以降と1、2歳では異なるはずであり、この点はまだ未解明です。また、後者の初期のごっこにおける象徴的といわれる“ふり”の融合性がどのようなものかについても同様にまだ未解明と考えます。これらに関連して、2、3の奇妙な事実を報告したいと思っています。